

佐賀関の「楽・楽マルシェ」

住民と学生ら 集う場100回目



楽・楽マルシェの運営に携わる日本文理大の学生ら＝大分市佐賀関

【大分】大分市佐賀関の中心部で毎月第4土曜日に開かれている「楽・楽マルシェ」が100回目を迎えた。地元住民や学生らが野菜、総菜などを販売。「地域の人が集う場」と、8年間休んだことはない。住民も楽しみにしており、主催するまちづくり団体は「まだまだ続けていきたい」と思いを新たにしている。

マルシェは、NPO法人さがのせき・色彩カフェのメンバーやまちづくりを研究している日本文理大（大分市）の学生らで構成する「ローカルデザイン会議」（山田悠一代表）が主催。高齢化や人口減少が進む地区中心部の活性化を目的に、2012年7月に始めた。関あじ関さは通り沿いにある広場が会場で、現在は地元の民生委員経験者らのグループ「佐賀関げんきがかり」や学生、高校生らが出店。毎回午前10時から午後1時まで、手作り総菜や地元の商品、野菜などを売っている。

運営は同大工学部の吉村充功教授（44）のゼミに所属する3、4年生が中心。夏は夜マルシェ、年末は餅つきを企画するなど、にぎわいつくりを知恵を絞る。

100回の節目となった10月24日は、「子どもたちが地元のお店に足を運ぶきっかけに」と商店街を巡るスタンプラリーを開催した。4年の寺嶋敏也さん（22）

主催団体 「まだまだ続けたい」

「お年寄りが買った物をベンチで食べながら談笑したり、子どもたちが喜ぶ姿を見ると、やって良かったと思う」。近くに住む須川啓子さん（66）は「いつも静かな通りだけど、マルシェの日にはぎやかでいい」と買い物を楽しんだ。

マルシェは天気の悪い日や年の瀬でも休まない。新型コロナウイルス感染拡大で4～6月は、地元住民と大学OBだけで規模を縮小して実施した。

学生リーダーを務める4年の木村勇人さん（21）は「ここでの経験は自分たちにも役立つ。地域の課題が少しでも解消できるように活動を後輩に引き継ぎたい」。山田代表（73）は「心強い学生たちの力を借りながら、これからも長く続けていく」と話している。

（玉井美智子）

大分市佐賀関地区の人口は8072人（9月現在）。30年前の約16400人から半減し、高齢化率は50%を超えている。